

MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第52,53合併号 2020年7月

もくじ

小泉環境大臣表敬訪問	林家カレー子
都市の自然環境の保全（後編）	玉木幸裕
コロナとともに自然を知ること	中西由美子
「神田川サミット2019」報告	保坂公人

小泉環境大臣表敬訪問



2019年は4月30日までが「平成」、5月1日から新年号「令和」となり、日本の歴史が大きく変わった年となりました。

私自身は夫の三回忌を子や孫たちと無事済ませ、一寸ばかりホッとしたところでした。そこに、環境カウンセラー全国連合会の佐々木進市代表理事より「第一回環境カウンセラー保全活動表彰」の市民部門の受賞が決まりましたとの嬉しいお知らせが届き、翌月3月22日、原田義明環境大臣より身に余る環境大臣賞（市民部門）を拝受いたしました。

秋になりますと内閣の改造が行われ、9月11日に小泉進次郎環境大臣が誕生。早速、佐々木代表理事から「新大臣の所に環境カウンセラーの存在をアピールに行きましょう」との連絡をいただきました。

そして10月9日、私達は環境省へと向いました。実はこれはとても運が良かったようで、たとえ十分間の訪問でも、この日を逃したら数か月後になったと後に聞きました。

林家 カレー子

大臣室に伺ったのは、私と佐々木理事、元環境大臣で現在環境カウンセラーの顧問の衆議院の齋藤鉄夫議員と、この日をお膳立てしてくださった秘書の小堀さん、そして私の娘の林家まる子の5人です。

大臣室に足を踏み入れようとした瞬間ビックリ、そこに小泉環境大臣がもう立って待っていてくださったのです。更に大臣の地元横須賀名物「海軍カレー」の味付けをした柿ピーのお土産まで準備してくださって、本当に恐縮してしまいました。

席に着くまでの間、「私は寄席のファンなのです」と言われて、寄席芸人の名前を挙げられたので大変盛り上がり、MECCの定例会で発言しているような平常心で懇談することができました。小泉大臣の心配りには本当に感動いたしました。

環境カウンセラーの働きについて大臣は「私たちが発言するよりも皆様が発言された方が効果あります」と、熱いエールを送ってくださいました。十分間の時間は瞬く間に経ち、少しオーバーして大臣室を後にしました。

今振り返りますと大臣は、一言ひと言丁寧に聞いてくださり、そしてハッキリ応えてくださったので、実際は十分でも、とても充実していて時間ももっと長く感じるほどでした。

昨年に引き続き今年も、むさしのFM「林家カレー子のクールチョイスでGo!」という環境啓発番組が毎日放送されることが決まりました。環境カウンセラーに期待を寄せてくださった、大臣の思いにお応えできるように精いっぱい取り組んでまいります。MECCの皆さま、お世話になりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

都市の自然環境の保全(後編)

前号で、筆者が勤務先工場で環境モニタリング業務を担当したことから「生物多様性」に興味を持ち、生態系保全の専門家を工場に招き講演会を開催することで都市(市政区域)の生態系の広域ネットワークづくりの試みを行ったなどを話した。ところで生物多様性の回復・保全の観点からは期待したいことがまだある。



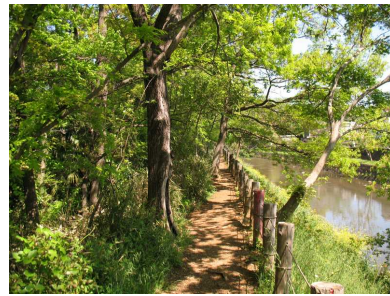
草本植生を備えた直線化区間

平成2年に河川環境の整備・保全に資する目的で「河川水辺の国勢調査」が始まり、河川の水中・底質中に生息する生物だけでなく河川敷、護岸、及び河畔林に生息する植物と動物の生息状況の調査が実施されるようになった。調査は「河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル」に従い実施され、その結果はデータベース化され河川工事に際して自然環境保全への配慮が適切にできるよう利用可能である。しかし調査の間隔が5～10年と長く、調査時期が年3回と限られ、調査地点は基本的に河口からの距離の一定間隔毎で固定されていること(一級河川)等から、生態系の保全に資する十分な情報量を得ることには一定の限界があると考えられる。絶滅や減少が危惧される生物の多くは発生場所が局在化していたり、発生時期が極めて短いものも多いからである。一方、調査マニュアルには補完的に地域の生息生物情報の「聞き取り調査」を実地調査に先行して行う旨が示されている。聞き取り対象は地域の生息生物に関する情報を蓄積している研究機関、専門家、教員の、愛好会、同好会等が例示されている。

コロナとともに自然を知ること

令和2年の年明け頃、「中国・武漢で原因不明の肺炎発症」の小さな新聞報道以降、現在では世界中の人がかつてない規模での感染症に翻弄される日々が続いています。ここまでの騒ぎになるとはだれも想像していなかったのではないのでしょうか。この半年間で人類は新型コロナにより、かつてない

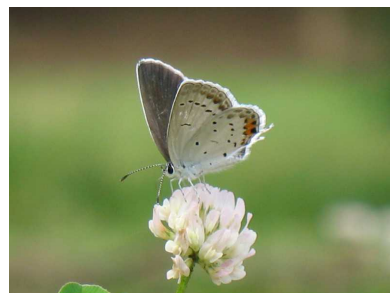
環境カウンセラー 玉木 幸裕



保全された河畔林

ここで、聞き取り調査がより効果的に行われるには、調査対象の生物の生息状況に関して知見・情報収集能力が高く活動範囲の広いNPO等の協力が望まれる。また河川を利用する事業者の協力も効果は大きいと考えられる。

多様な植生を伴った河川は、それ自体が豊かな生態系であるだけでなく、上流域から下流域への優良な生態系のコリドーである。生息生物の情報量を増やし河川整備に伴う生態系保存施策の有効性が最大限に発揮されることに資するため、そして都市広域生態系ネットワークの形成の促進に資するため、より多くのNPO等・事業者が河川環境の保全にこれまで以上に目を向けていただき、積極的に取り組むことに期待している。



河畔の草本植生帯を移動しながら多くの昆虫が生息できる

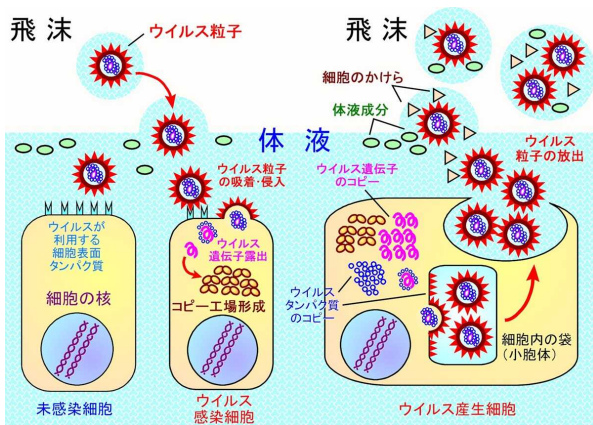
中西 由美子

多くの識者が人類とコロナの向き合い方や対応等について様々な立場から見解を述べ、不安な人々の中には、普段読まないそうしたコラムを読む人も増えたのではないのでしょうか。また、政治に無関心だった日本の国民も、政治家のコメントや方針を注視するようになりました。

現役世代にとっては、テレワークが急速に進み、うちで過ごす時間が増え、家族という存在を良くも悪くも意識させられる機会となりました。

コロナウイルスという生物とも無生物ともいえない存在が、地球上で生物界の覇者のように突き進んできた人類の意識、思想、行動を大きく変えようとしています。自然科学をかじった筆者は、まず生物学的な視点を皮切りにコロナ禍を論じてみたいと思います。

ウイルスは電子顕微鏡でないとみられない大変微小な存在です。その実態は、遺伝子の本体であるDNAまたはRNAが、蛋白質などの殻に囲まれているという単純な構造をしており、1つの細胞ですらありません。生物学ではウイルスは生物と無生物の境界にあるとされる存在です。しかし、この不思議な存在は、いったん生物の細胞に取り込まれると、その細胞の司令塔であるDNAを書き換え、細胞に自分自身のコピーを作らせ、外界へと出ていきます。



新型コロナウイルスの感染と増殖の模式図
(c) 近畿大学医学部免疫学教室宮澤正顕教授

地球の生物の進化は、生物の設計図のDNAが変異した結果の積み重ねです。遺伝子を書き換える、コピーを作るというウイルスのふるまいが、生物の進化に関与してきたと考えられています。ある生物のDNAにはウイルスのDNAが既に組み込まれているということがわかってきました。例えばヒトのDNAには、ボルナウイルス（ウマ・ヒツジに脳脊髄炎を発症）DNAが組み込まれており、ヒトはボルナウイルス感染症には罹患しません。ウイルスは生きた細胞で活動しますので、細胞と「共生」関係を結んできたと考えられています。今後の研究の進歩により進化のメカニズムがさらに明らかになっていくことでしょう。

共生関係もあれば、時に、感染症を広げて多くの命を奪うこともする。自然生態系の中ではそうしたことは珍しいことではありません。他の野生動物も

感染症で突如死滅することがあります。ヒトも生態系の一部の生物にすぎません。自然界ではこうして個体数調整をされているのかと考えてしまいます。

冬になるとはやるインフルエンザは毎年、抗原型の変異が起こり、「今年は何型」などと言われます。インフルエンザウイルスは元来は北極圏付近の湖沼にあり、そこにすむ水鳥の消化管内で共生しています。季節の渡り先で家畜の体内に入り、変異を繰り返しながらヒトへの感染性も獲得するので毎年抗原型が変化します。ヒトのウイルス感染症は、このような野生動物-家畜-ヒトという連環により起こることがあります。狂犬病ウイルスは、上記のような変異の過程を経ることなく、ウイルス保有哺乳類から一気にヒトに感染します。狂犬病は、発症すると致死率100%と大変危険なもので世界中で恐れられています。日本では「狂犬病予防法」による徹底対策により、既に根絶されています。

1980年代、WHOによって「天然痘撲滅宣言」が出され、天然痘をはじめ、ペスト、コレラなど、古代から続いたヒトと感染症の戦いは終わったとされてきました。しかしながら近年、「新興・再興感染症」が頻発しています。これらの感染症は、AIDS、デング熱、SARS、MERS等、1970年代以降に病原性が確認され、社会的にも重大な問題となりました。そして、私たちは現在コロナ感染症に直面しています。

公衆衛生が格段に向上した現代社会において、なぜ今、新興・再興感染症が頻発しているのでしょうか？その原因として、次の3つが指摘されています。

- ①森林等の開発行為による、ウイルス保有野生動物とヒトとの接触の増加。
- ②地球温暖化による、ウイルスを媒介する動物の生息域の拡大。
- ③ヒトの移動の激増。人口集中化。

この3つとも、人類がなしたことが原因となっています。環境問題のなかで、解決が急がれているが、経済発展を盾に解決が妨げられている問題でもあることを鑑みると、今回のコロナが一種の人災と言えるのではないかと考えてなりません。冒頭に書いたように、今一度自分たちのふるまいについて、立ち止まり、考える必要があるのではないかと警告的な論調も出てきています。未曾有の感染症は、社会構造を変える勢いですが、環境問題解決策にも大きく影響するであろうと考えています。この高度な医学や技術が発達してもなお、ウイルスという地球生態系の原理の前に翻弄されているという事実を目の当たりにしています。この今、自然の原理をきちんと知ったうえで、人類がどう進んでいくべきかを真剣に考えていくチャンスととらえるべきと思っています。

「神田川サミット2019」報告

保坂 公人

開催日：2019年11月9日（土）

場所：神田川中流域及び新宿区戸塚地域センター

内容：午前 「神田川中流域の魅力を探る」

（江戸川橋～戸塚地域センター間ウォーキング）



午前 肥後細川庭園



戸塚区民活動センター前の水生動物観察

神田川水系全図



午後 神田川サミット2019

（戸塚地域センター7階ホール）

- ・小泉正行氏講演
（東京都島しょ農林水産総合センター）
- ・新宿区みどり公園課八住さん活動報告
- ・戸塚第三小学校の子どもたちの活動報告
- ・渡辺泰徳氏（元都立大教授）
- ・その他参加団体の活動報告



午後のサミット

「神田川サミット2019」行事決算書

費目	金額（円）	備考
<収入>		
参加費	11,000	@500円×22人
寄付金・助成金	15,000	MECC
団体負担	17,188	
収入計	43,188	
<支出>		
会場費	0	新宿区みどり公園課
講師謝礼	20,000	@10,000円×2名
小学生へ謝礼	1,500	図書カード@500×3
チラシ作成費	10,350	版下作成費 印刷代、コピー代
配布資料作成費	8,623	
その他雑費	2,715	文具、用紙、茶菓代 ハガキ他
支出計	43,188	
収 支	0	

編集後記

2020年1月（実際は2019年12月以前のようなのですが）中国武漢を端に発したCOVIT-19は瞬く間に全世界に広がり、パンデミックの恐怖を改めて知らしめることとなりました。これらはいまだ収束の心配がなく今後数年は継続するのではないとも言われています。当協議会においても研修会などのイベントも軒並み中止となったため、活動報告記事が出来ず、当初3月に予定していた「MECCだより」第52号の発行を見送らざるを得ませんでした。今回はそれを埋め合わせるべく第52号・第53号合併号として発行いたしました。若干旧聞の報告もありますがご了承ください。現状まだコロナ禍は続いており、環境カウンセラーとしての活動もままなりません、こんな時こそ環境カウンセラーの活動の場もあるのではないかと考えているところです。

発行者：NPO 武蔵野多摩環境カウンセラー協議会(MECC)事務局
 〒180-0011 東京都武蔵野市八幡町3-1-1 稲田 昂
 TEL：042-646-3822
 ホームページ：<http://www.mecc.or.jp/>
 編集者：望月 眞